



Vol. 46に寄せて

ようやく秋らしい気候になってきました。秋になると花の数が少なくなるように感じますが、まだまだ見頃の花は多くあります。10月では、秋の七草として知られるハギやススキ、フジバカマが見頃となっています。そして秋は収穫の時期でもあり、多くの果実が実を結んでいます。有毒のものもありますので、口には入れないようにお願いします。そして、10月といえばハロウィンですね。1号園入り口の花壇では、ハロウィンを演出した展示も行っています。是非、ご覧いただけたらと思います。



10月に見頃を迎える植物：バクチノキ（バラ科）

和名：バクチノキ

学名： *Laurocerasus zippeliana* (Miq.) Browicz
(= *Prunus zippeliana* Miq.)

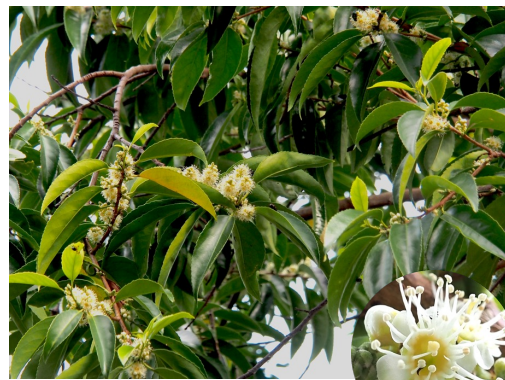
薬用部：葉

生薬名：バクチヨウ（バクチ葉・博打葉）

用途：鎮咳・去痰

栽培場所：植物園 4号園

開花時期：10月



バクチノキについて

バクチノキは、関東地方以西の本州・四国・九州・沖縄・台湾に分布する常緑性の高木で、高さは10~20 m となることもある。葉は互生し、長楕円形で長さは10~20 cm、先は鋭く尖る。縁に細い鋸歯がありその先は腺になる。また葉柄の上部には1対の蜜腺がある。花期は秋で、葉腋に葉より短い総状花序を出し、小白花を多数咲かせる。円形の小さい花弁を5枚持ち、雄しべは30~50個あり花弁よりかなり長く、雌しべを1個持つ。果実は卵形から楕円形、長さ1.5~2 cmで、翌年の春ごろに紫黒色に熟す。バクチノキは、樹皮が鱗片状に剥がれ落ち、その跡が紅黄色のまだら模様になるのが特徴である。



花

バクチ葉について

新鮮葉を水蒸気蒸留しその留液をバクチ水として鎮咳・去痰を目的に用いられていた。葉には、生薬の杏仁（アズノ種子）と同じように青酸配糖体を多く含み、かつてはキョウニン水の製造原料としても用いられ、バクチノキから製造されたものはバクチ製キョウニン水と呼ばれた。また、民間的に、新鮮葉を細かく刻んで煎じて作られた煎液を「あせも」の患部に外用で用いられた。



果実（1月）

10月に見頃を迎えるその他の植物 <科名はAPG分類体系による>



クコ（ナス科）

生薬名 } クコシ（枸杞子）[果実]

[薬用部] } ジコッピ（地骨皮）[根皮]

効能：滋養強壮など



ハブソウ（マメ科）

生薬名：ボウコウナン（望江南）

薬用部：種子

効能：瀉下、健胃



アイ（タデ科）

生薬名 } ランヨウ（藍葉）[葉]

[薬用部] } ランジツ（藍実）[果実]

効能：消炎、解毒、解熱



ゲンノショウコ（フウロソウ科）

生薬名：ゲンノショウコ（現証拠）

薬用部：地上部

効能：止瀉、整腸など



ステビア（キク科）

砂糖の約100倍いとされる成分を含み、矯味薬として配合されるほか、非糖性甘味料としても利用される。



ヤマバギ（マメ科）

葉は茶葉の代用品として用いられ、女性のめまいやのぼせには根を煎じて服用する。



フジバカマ（キク科）

生薬名：ランソウ（蘭草）

薬用部：花期の全草

効能：利尿、解熱、通経など



イヌサフラン（イヌサフラン科）

生薬名：コルヒクム子

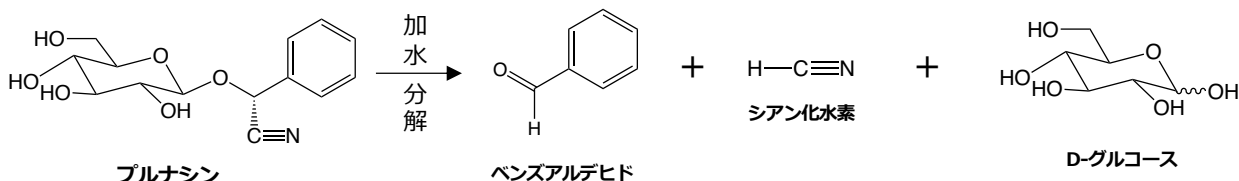
薬用部：種子

効能：痛風発作時の治療 有毒

バクチ葉の成分と利用

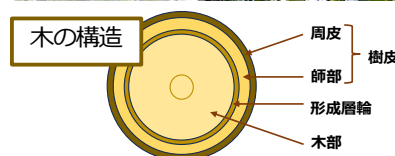
バクチ葉には、靑酸配糖体のプルナシンが含まれ、葉を水蒸気蒸留して得られるバクチ水が薬用として用いられる。プルナシンは加水分解して、ベンズアルデヒド、靑酸（シアン化水素）、グルコースを生成する。靑酸は微量で呼吸中枢を刺激する作用があり、喘息や咳、呼吸困難に有効とされている。ただし、靑酸は猛毒でもあるので、個人での使用は避けた方がよい。同じバラ科の生薬である杏仁を水蒸気蒸留して得られるキョウニン水も、同様に鎮咳・去痰薬として用いられるが、杏仁にはプルナシンにグルコースがもう1分子結合したアミグダリンが多く含まれる。（杏仁については、植物園レターVol.20をご覧ください）

靑酸配糖体



セイヨウバクチノキ：バクチノキの近縁種にセイヨウバクチノキ（*L. officinalis* = *Prunus laurocerasus*）があり、本園6号園北側のフェンスの外にあるが、フェンス越しに観察することができる。ヨーロッパ南東部、アジア西南部が原産で、バクチノキとよく似ている。花期は4月で、葉腋に10 cm程の総状花序を出し、小白花を多数咲かせる。

特徴のある樹皮を持つ植物：木本植物の茎では、形成層が活発に成長し隣の維管束の形成層と連結して形成層輪を作る。木は、形成層輪の内側では木部、外側では師部を新たに作り太くなっていく。樹皮は、この形成層輪の外側を指す。一方、成長に伴い最初に表面を保護していた表皮は剥がれ落ちて、代わりにコルク組織と呼ばれる周皮が形成され表面を保護する。幹が太くなっていくと、周皮の外側が死んで剥がれ落ちていくが、その剥がれ方や裂け方などは樹種ごとに異なってくるので、樹木によっては特徴的な樹皮の様子を観察することができる。同じ木でも樹齢によって、また生育環境や地衣類などの付着物によっても外観が異なってくる。今回は、特徴のある樹皮を持つ植物として、バクチノキ、サルスベリ、ナギを紹介する。



バクチノキは、秋から春にかけて樹皮がうろ状に剥がれ落ちて木肌が露出する。樹皮は本来は灰褐色であるが、剥がれた直後は白色で次第に橙色や褐色になりまだら模様となる。この樹皮の剥がれ落ちる様子が、博打で負けて身ぐるみ剥がされる様子に似ていることが、名前の由来となっている。今年は、うろこ状ではなく、樹皮の大部分が幅広く剥がれ落ちる様子が見られた。

サルスベリ（*Lagerstroemia indica*）は、中国が原産のミソハギ科の植物で、幹全体の樹皮が剥がれてスベスベになっているのが特徴で、サルも滑り落ちてしまうぐらいスベスベなのが名前の由来である。花期が長く、100日くらい鑑賞できることから百日紅（ヒャクジツコウ）の別名があり、植物園では4号園で栽培している。剥がれた樹皮に、止血、解毒の効果があると伝えられている。

ナギ（*Nageia nagi*）は、裸子植物でマキ科の常緑高木であり、葉は幅広いが針葉樹の仲間である。樹皮は、最初滑らかで灰色をしているが、うろこ状に剥がれ、剥がれた後は褐色や橙色などまだら模様になる。ナギも今年は樹皮が幅広く剥がれ落ちる様子がみられた。ナギは、神社に植栽され、熊野三山系の神社では神木とされている。植物園では4号園で栽培している。



植物園の樹皮当てクイズ

下の写真は植物園の木本植物の樹皮の写真です。どの植物の樹皮かわかりますか？下の選択肢の中から選んでください。



4号園で見ることが
できます

兵庫県の木です

植物園で高い木の
ベスト3に入ります

秋には臭い実が
できます

選択肢： メタセコイア イイギリ クスノキ イチョウ

編集後記

ようやく涼しくなり始め、植物の観察に適した気候になってきました。少し涼しくなると、意外にも蚊の活動は活発になります。日本の蚊は種類にもよりますが、20~30℃の気温を好み、30℃を超えると動きが鈍くなります。蚊にとっても過ごしやすい気候になったわけです。植物園の入り口には、虫除けスプレーを置いてありますので、来園時に自由にお使いください。

神戸薬科大学 薬用植物園

園長 土反伸和（医薬細胞生物学研究室 教授）

西山由美（文責）、平野亜津沙、大井隆博

E-mail : nisiyama@kobepharmaceutical-u.ac.jp

総合教育研究センター支援部門 竹仲由希子

